

ライフスタイル

☎026-236-3143 ✉kurashi@shinmai.co.jp

女性の日記は「歴史の宝庫」

筑北出身・島利栄子さん主宰「学ぶ会」30年

東筑摩郡筑北村出身の女性史研究家、島利栄子さん(82)は千葉県八千代市が主宰する「女性の日記から学ぶ会」が創立30周年を迎えた。同会は近現代の市井の人々がつづった日記の価値を再認識し、時代背景や暮らしを読み解く活動を続けてきた。身の回りの出来事や率直な思いをそのつど書き留める日記を「生きた歴史の宝庫。本人の暮らしや生き方だけでなく、時代性も見えてくる」と強調する島さんに、会の活動や日記から学ぶ意義について聞いた。

(井口 賢太)

島さんは、在野の女性史研究家として各地の女性から戦争体験を聞き取る中で、日記の処分への悩みを耳にして収集を始めた。飯田市の元教員の女性からは100冊以上の日記を見せてもらい、戦時中に満蒙開拓団の子どもたちを教えた千曲市の故塚田浅江さんには何度も頼み込んで、数ある日記から1冊のみ預かることができた。

日記からは庶民の暮らしがうかがえる。一方で女性の日記は結婚を機に処分されたり、家事に追われて書かれなくなったりと男性に比べ数が限られると考え、集中的に集めて残そうと決心した。1996年に女性10人で同会を立ち上げ、各地で日記の魅力や意義を話して回った。珍しい活動として日記を寄贈されることも増え、これまでに約3千冊が集まった。

ただ、日記というプライベートな性質上、寄贈を断られることは少なくない。「他の会員に見せないで」と言われたり、寄贈後に返却を求められたりした経験も。だからこそ「寄贈者へ

の感謝の気持ちが増した」と島さん。集めた日記が高校生らの学習に活用された時は「会の中だけで活用するより、研究の機会が増えて幸せだ」と受け止めた。

日記を通してその時代を懸命に生きた人々を知り、多くを学んできた。所蔵する日記は現

近現代史 読み解く手がかり

「女性の日記から学ぶ会」が作成した約3千冊の日記目録。男性を含めた約160人の日記の特徴、寄贈過程、筆者の置かれた境遇などを10年がかりで会員らがまとめた。島さんは、明治20年代から現在まで「日本の近現代史を通過できる」とする収集日記が社会に一層役立つように目録が活用されることを願う。

た1941(昭和16)、42年の日記は満州(現中国東北部)の視察団に参加した際の記録。移民への気持ちや現地の様子が細かく描写されている。村内の別の女性が戦後、農作業や婦人会についてカレンダーの裏に書き留めた日記もある。松本市の農

家の女性は、戦中戦後の行動記録を1日1行で記載。出費の内訳も記した。当時の養蚕農家の生活や女性の社会参加の状況を知らずにはいられないという。島さん自身も、小学2年から書きためた日記を寄贈。3年がかりで目を通したら「人生を2

思い受け止め 未来につなぐ

日記とは「生きる過程の一里塚(松本市の百瀬武さん)」。『女性の日記から学ぶ会』の会員は長野県など全国に約150人おり、会所蔵の日記の精読とといった通常の活動を行うほか、身内の日記を寄贈した人も。日記への向き合い方や筆者への思いを30周年の記念誌に寄稿した会員もいる。

元大学教授の荒木康代さん(72)大阪府は高校・大学時代は読書の感想や社会的な出来事に対する意見を、20代半ばは結婚への迷いを、出産後は子育てについてを主に日記に付けた。「誰かの目に触れるかもしれない」と意識して書くのと、そ

の時の感情のままに書く場合がある」とし、夫婦げんかなど読み返したくない部分は処分した。会の活動は「自分の記録を残しておきたい作者の思いをくみ取るもの」と捉える。

日記から時代性とともに普遍性を感じたのは千葉県の木めぐみさん(72)。戦時下に青春時代を送った女性の日記を読み「時空を飛び越えて共有できる気持ちになった」。日記との出会いは人との出会いと振り返る。

信州大付属図書館職員の前木映梨香さん(34)上田市は、2019年の台風で損壊した千葉県の祖父宅から日記を救った。

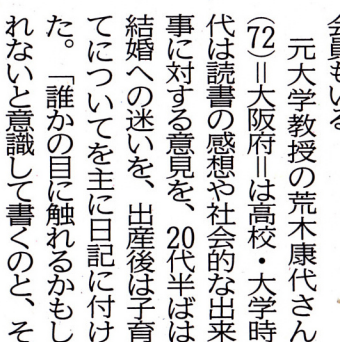
た。日々の生活が隙間なく書き込まれた晩年の筆致から「必死に日々を生きた祖父の意地」を感じ取った。

亡母の日記を寄贈した伊那市の唐沢洋子さん83は、80歳を過ぎて入退院を繰り返すようになった母が、家族に感謝の言葉を残したいと書き始めたことを回想。千葉市の北村純子さん(80)は、夜更けに一人で菓子をつまみつつ日記帳に向かった母の姿を思い出す。日記を付ける理由を尋ねると「書くに足る一日を送るため」との答え。

「一日一日を大切に生きたい」という覚悟があった」と受け止めた。



「女性の日記から学ぶ会」に全国から寄せられた日記を保管する千葉県八千代市の図書館書庫を見学する会員たち



しま・りえ) 女性史研究家。1944(昭和19)年、東筑摩郡坂北村(現筑北村)生まれ。信州大文学部卒。「女性の日記から学ぶ会」代表。近現代をひたむきに生きた信州の女性を描いた連載「ときを刻む女」(1993〜95年)、戦中戦後の女性たちの日記をひもといた「女の歳月」(97〜99年)を本紙に連載した。2017年、歴史や資料の収集などで貢献した人に贈られる「水木十五堂賞」(奈良県大和郡山田町)を受賞。18年に空き家となっていた筑北村の実家を活用し、日記の保管・展示拠点日記の館 1号館を開館した。